

錦織監督

# 映画の現場から



● ● ● 21

## 価値観の転換期に贈る心の映画「渾身」②

「渾身(こんしん)」という言葉の意味を辞書で引くと「渾」は全ての意、体全体、全身とある。相撲の醍醐味(だいごみ)を表しているいい言葉だ。原作の川上健一先生にお会いした際、渾身というタイトルに惹(ひ)かれたと率直に申し上げた。隠岐相撲は力士が渾身の力でぶつかり合うだけでなく、支えている島の人たちもまた「渾身」で応援しているのに感動するので、そういう意味合いもタイトルにある、と盛り上がった。

私は取組当日に相撲をとる代表力士はもちろん、その日まで支えてきた人々みんなが主役なんだと思う。周りのただの傍観者ではなく、相撲の開催が決まると毎日稽古が続き、地域の人たちは当たり前になり毎日毎晩お世話をする。



三重の土俵を完全再現

## 支えるみんなも主役 熱意と誇りを受け継ぐ

映画化のため初めてごあいさつに島に渡ったとき、古典相撲を支える大巾会(大巾とはいわゆる化粧まわしのこと)の皆さんにお話を伺う機会があった。その際「何年前のあの取組は…」とか「あの時の番々外大関の誰それは…」と相撲の話でもちぎりになった。生活の中に相撲が息づいているのを目の当たりにし、ますます意欲がわいた。

隠岐相撲が素晴らしいのは、大先輩たちの背中を見て若者たちが育っていること。心技体、三拍子そろって正々堂々と対戦することが求められる中、若者たちは黙々と稽古に励んでいる。今回の撮影には地元力士の皆さんに参加していただいた。ガツン!という頭と頭がぶつかり合う音が土俵に響き、ガチンコの迫力ある取組シーンを撮ることができた。本物の迫力に、俳優陣も触発され、相撲シーンのもとよりお芝居のシーンにも好影響を与えてくれたと思う。

相撲を指導する地域の先輩方の厳しさは半端ではない。相撲をとっている力士たちはどこにでもいる現代っ子だが、その表情は真剣そのもの。地域の代表として選ばれることを誇りに思う若者が確かにそこにいた。昔から受け継がれてきた相撲が若い世代に伝わっている。

20年に1度の遷宮相撲を完全再現すべく三重土俵を作っていたとき、四隅の柱も本番と同じように山から切り出し、本物の遷宮相撲さながらに撮影に挑んだわけだが、ご協力いただいた大人たちの「本気度」と「こだわり」にその理由が見えたような気がする。地域全体を考える大人たちのこだわり、熱意、誇りにあふれる姿には、地域の活動に参加しない若者が増えていることを、時代だからしょうがないとツェネレーションギャップを理由に嘆いているのは大きな違いを感じてしまった。そこに今回の映画の真のテーマが透けて見えてきた。

(錦織良成・映画監督)

第2、4金曜掲載